

2023 年度上野千鶴子基金助成金最終報告書【HP用】

1. 助成対象事業	「女性学・ジェンダーの発展に寄与する調査・研究・出版」
2. 事業の区分	「Seeds プロジェクト」
3. 氏名/団体名	施 欣淳
4. 事業名	2000 年から 2022 年までのマスメディアにおける女性芸人のイメージの変遷の研究
5. 助成額	
6. 事業実施期間	2023 年 9 月～2025 年 7 月
7. リンク	

8. 事業の目的

本研究の目的は、日本のマスメディアにおける女性芸人の身体表象に注目し、従来の女性規範から逸脱した身体、女性性への従属や利用、ジェンダー秩序への抵抗といった異質的要素が併置するという混成的な状態を分析することで、多層的かつ関係的なハイブリッドな女性主体のあり方を明らかにする点にある。さらに、女性芸人の表象変遷とその背後に隠されたメカニズムを解明することによって、女性をめぐる言論空間の意図や意味をも解明し、最終的にはその改善を促すことにある。

9. 実施内容

本研究は、日本のマスメディアにおける女性お笑い芸人の表象変遷に着目し、ジェンダー規範との関係性を手がかりに、ひとつの価値観やジェンダー規範に回収されることなく多声的でハイブリッドな女性主体の可能性を探るものである。

助成期間前半（2023～2024 年）には、修士論文を完成させ、女性芸人の山田邦子・森三中・渡辺直美を対象とした新聞記事分析を通じて、容姿表象の変遷を明らかにした。その内容を論文「逸脱を演じる女性たち——新聞記事における女性芸人の容姿に関する表象分析」として同志社大学メディア学研究会誌『メディア学—文化とコミュニケーション—』第 39 号に掲載した。その後、博士後期課程に進学し、研究対象を山田邦子に焦点化した。国立国会図書館で女性週刊誌記事 355 件を収集し、バラエティ番組『オレたちひょうきん族』DVD を視聴・分析するなど、資料の整備を進めた。

2025 年度に入ってから、自身の研究方向を再検討し、女性芸人研究における適切な切り口を「身体性と女性主体」と定めた。すなわち、「美」を規範とする女優的な女性像に対して、女性芸人がしばしば「ブサイク」「女性らしくない」と位置づけられてきた身体表象に注目しつつ、その一方で性役割規範に関わる発言や振る舞いを求められてきた点に着目した。この観点から、山田邦子の冠番組『やまだかつてないテレビ』の DVD を新たに分析対象に組み込み、論文を執筆した。

また、2025 年 1 月には中国出身の女性芸人いぜんへのインタビューを実施する運びとなった。当初は、同志社大学のお笑いサークルに所属する女性部員のインタビューを通して若者のお笑い実践の実態を明らかにすることを計画していた。しかし、ライブ現場調査を進める中で、女性芸人のハイブリッド性という研究テーマにより即したインタビュー対象として、中国出身の女性芸人いぜんと出会い、同郷という縁からインタビューを行う機会を得た。彼女は調査期間中にメディア出演の機会を増やし、人気

を高めていったほか、現在日本お笑いの頂上決戦『M-1 グランプリ』の予選に参加していることから、今後の研究において重要な事例となる可能性が高い。本事例に基づく研究成果の一部は 2025 年 11 月にカルチュラル・タイフーン 2025 で口頭発表することが採択済である。ただし、本助成期間中には分析を完了できず、今後の課題として継続する予定である。

10. 事業の成果と自己評価

本研究では、新聞記事・バラエティ番組・女性週刊誌を対象に、日本の女性芸人の表象変遷を分析した。その結果、新聞記事においては、山田邦子が外見よりも人柄や人生の起伏を通じて描かれ、森三中は家庭や母性を軸とした「かわいいブス」という新たな像を示し、渡辺直美は初期の「ブスキャラ」を経て「自分らしさ」を象徴する存在へと変化していた。これらの比較から、女性芸人の「キャラクターの表象」と「本人の本来の表象」は分離から一体化へと移行し、女性の美に対する評価が多様化・寛容化してきたことが明らかとなった。また、山田邦子を中心とする分析からは、テレビ番組で規範を攪乱する身体表象を構築しつつ、週刊誌では伝統的規範に従属する姿を求められるなど、公私を横断する多声的でハイブリッドな主体が浮かび上がった。成果として、4 回の学会発表を行い、1 本の論文を刊行し、加えて 1 本の論文を投稿済みである。

本研究は、女性芸人を対象とすることで、これまで女優やアイドル中心であったジェンダー表象研究を拡張し、女性の容姿と主体の関係を新たに照射する成果を得た。助成金を活用することで、当初の計画である新聞記事分析や週刊誌・番組分析を着実に実施し、学会発表・論文発表を通じて社会的にも共有できた点は高く評価できる。特に、女性芸人を「逸脱者」としてではなく、制度・文化・メディア環境の中で生成されるハイブリッドな主体として捉え直した点は、学術的にも独自性を有すると考える。さらに、研究の射程を広げ、現役女性芸人（例：いぜん）のインタビューを通じた新たな分析基盤を得たことは、今後の大きな展開につながる。

11. 成果物

- ① 論文：施欣淳 「逸脱を演じる女性たち——新聞記事における女性芸人の容姿に関する表象分析」『メディア学—文化とコミュニケーション—』同志社大学大学院メディア学研究会,第 39 号,pp55-95,2024.
- ② 論文：施欣淳 「山田邦子にみるハイブリッドな女性主体とその限界」（2025 年 8 月『女性学』投稿中, 掲載審査中）
- ③ 研究発表原稿：施欣淳 「逸脱を演じる女性たち——新聞記事における女性芸人の容姿に関する表象分析」 日本メディア学会・社会情報学会「修士論文報告会」,オンライン,2024 年 3 月(口頭発表)
- ④ 研究発表原稿：施欣淳 「逸脱を演じる女性たち——新聞記事における女性芸人の容姿に関する表象分析」 中国ジェンダー研究会第 39 回研究会、立命館大学、2024 年 5 月(口頭発表)
- ⑤ 研究発表原稿：施欣淳 「パイオニアとしての山田邦子の事例研究」日本メディア学会 2024 年秋季大会,オンライン,2024 年 10 月(口頭発表)
- ⑥ 研究発表原稿：施欣淳 「山田邦子にみる非規範的女性像の形成とその限界」日本女性学会 2025 年度大会、立教大学、2025 年 6 月(口頭発表)
- ⑦ 研究発表要旨：施欣淳 「中国人女性お笑い芸人にみる戦略的ハイブリッドな表現実践」カルチュラル・タイフーン 2025@高雄（予定）、高雄大学、2025 年 11 月(口頭発表)（採択済）

⑧写真



2024.03.15 研究会 / Seminars

2023年度 日本メディア学会・社会情報学会 「修士論文報告会」(3/30開催)

プログラム：

	Room A	Room B	Room C
13:00-13:15	オープニング（報告会の趣旨説明、発表者の自己紹介など） 松井広志（愛知淑徳大学）		
	Room A モデレータ：丸山友美（静岡大学）	Room B モデレータ：飯田豊（立命館大学）	Room C モデレータ：澁谷遊野（東京大学）
13:15-13:45	夢沼阿由子（東京大学）「マーケティング思考がつくる生き方—自己啓発本・雑誌の言説分析—」	濱口英雄（上智大学）「放送ネットワークは地域発信にどう作用するのか—北海道のローカル民放局を例に—」	Mert Alpay（立命館大学）「Japanese popular culture consumption wave of New Generation Muslims: A critical study on Turkey」
13:45-14:15	李澤春（神戸大学）「1980年代以降の日本における「Working Woman」のイメージの変遷—実用情報誌『日経WOMAN』から—」	楊慶新（情報科学芸術大学院大学）「多文化・多元化されたメディアプラットフォームと自己アイデンティティの形成に関する研究—演劇「code play/码上演绎」の実践と分析—」	Tiffany S. Tanaka-Cooper / 田中・クーバー ティファニー（立命館大学）「Black Affirmation Through Japanese Media Mix / 日本のメディアミックスの通じて Blacknessを再確認」
14:15-14:45	施欣淳（同志社大学）「逸脱を演じる女性たち—新聞記事における女性芸人の容姿に関する表象分析—」	江口修平（九州大学）「携帯電話とインターネットの普及に関する実証研究—イノベーション普及モデルを用いた加速期・成熟期の特定と普及要因の検証—」	

「スクリーンショット 日本メディア学会公式 HP 掲載の『修士論文報告会』発表者プログラム一覧」

三



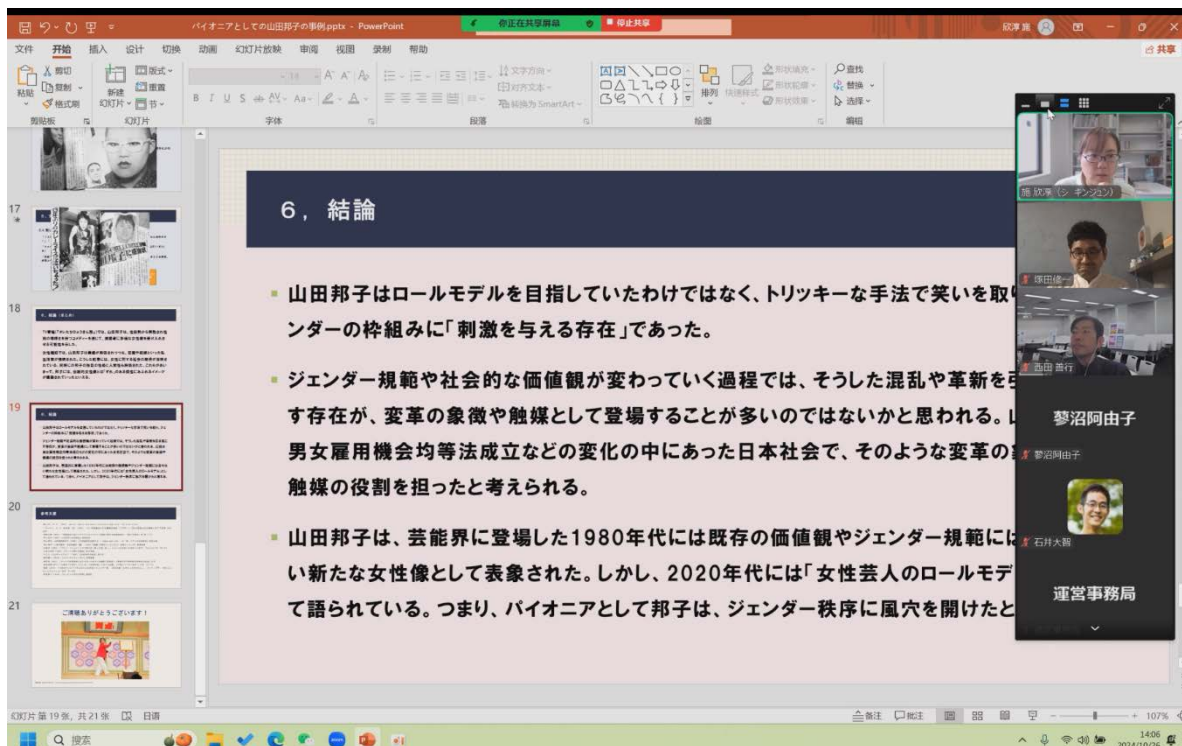
中国ジェンダー研究会

第39回

2024年5月18日（土）14：30～18：00
立命館大学 朱雀キャンパス 203教室

- 手代木さづき（京都大学大学院文学研究科）
「1940年代上海の越劇と「ひいきの文化」：越劇女優の「母」と「姉妹」を中心に」
- 施欣淳（同志社大学大学院社会学研究科）
「逸脱を演じる女性たち—新聞記事における女性芸人の容姿に関する表象分析」

「スクリーンショット 中国ジェンダー研究会公式 HP 掲載の発表者プログラム一覧」



「スクリーンショット 日本メディア学会 2024 年秋季大会オンライン発表の様子」



「写真 日本女性学会 2025 年度大会 会場の様子」